

放課後児童クラブにおける育成支援の質 — OJT や SACERS の相互関係と育成支援の質の関連 —

菅 原 航 平

Quality of support in after school care

Kohei SUGAHARA

【要 旨】

放課後児童クラブでの育成支援の質の向上の必要性については様々に指摘されているが、育成支援の質の明確な定義や標準的な測定方法は示されていない。育成支援の質の測定は OJT などの取り組みの効果測定としても重要であると考えられる。そこで、本報告では、SACERS の相互関係の項目などを活用しながら育成支援の質に影響を与える要因や育成支援の質の測定について検討するため、佐賀県の放課後児童支援員等に対して質問紙調査を行い127名の協力を得た。結果より、支援者1人当たりの児童数などは相互作用や質の主観的評価に影響を与えることが明らかとなった。また、相互作用の項目と質の主観的評価には相関がみられ、主観的な質評価も簡易的な質の評価方法としては活用可能性があると考えられた。

【キーワード】

放課後児童クラブ OJT 育成支援の質 職員会議 ノンコンタクトタイム SACERS

1. はじめに

厚生労働省は「新・放課後子ども総合プラン」において、放課後児童クラブにおける待機児童の解消を目指し、その後の女性就業率の更なる上昇に対応できるよう整備を行い、2019年度から2023年度までの5年間で約30万人分の定員の整備を図ることを目標として掲げている。このように量的拡充は急速に進められているが、質の保証という面では大きな課題も抱えている。約半数の放課後児童支援員は、放課後児童支援

員認定資格研修での24時間という限られた時間の研修受講に留まり、児童福祉などに関する専門的な教育を受けていないまま育成支援にあたっている。

このため、育成支援の質の向上には、入職後の職場（放課後児童クラブ）での継続的な研修が極めて重要であり、クラブ内での OJT を充実させる必要がある。OJT (On-the-Job Training) は、職場で実務の中で行う、職員に対する教育訓練のことを指す。平成27年3月に放課後児童クラブの基準に関する専門委員会で提出された、放課後児童クラブに従事する者の研修

体系の整理¹⁾でも、OJTとOFF-JTを効果的に組み合わせられるよう教育訓練の工夫を行う必要性が指摘されている。実際に「令和元年放課後児童健全育成事業の実施状況」²⁾では、「職場内での教育訓練(OJT)を実施している」と回答しているクラブが全体の79.4%となっている。

しかし、筆者の2019年に行った調査³⁾では、運営主体の研修への取り組みについて、支援員等の約4分の1が、運営主体は研修に取り組んでいないと感じていた。また、放課後児童クラブは、それぞれのクラブは規模が小さいことが多く、必ずしも指導的な立場の支援員が配置されているわけではないので、知識・技術や経験が少ない支援員等がクラブ内で指導を受けるということは難しい場合も多く、支援員等が日々のミーティングや事例検討などを活用しながら、職員集団として学び合っていくことが重要であると考えられる。

放課後児童クラブ運営指針⁴⁾においても、5章の5.(1)育成支援に含まれる業務内容に「○日々の子どもの状況や育成支援の内容を記録する。」「○職場内で情報を共有し事例検討を行って、育成支援の内容の充実、改善に努める。」など、記録の作成や事例検討を行うように記載されている。しかし、「令和元年放課後児童健全育成事業の実施状況」²⁾において、育成支援の記録の状況について、育成支援の内容を記録していると回答しているのは、全体の86.8%のクラブに留まっており、1割強のクラブは日々の育成支援の内容の記録が存在しない状況にある。また、情報共有や事例検討などを行うための職員会議についても、筆者の調査³⁾では、11.3%の支援員が平均1日おおよそ10分未満と回答しており、取り組みは十分とはいえないクラブも多く存在する。

保育などの育成支援の関連分野においては、会議や記録作成、研修、環境整備などの子どもと直接関わらない「ノンコンタクトタイム」といわれるような時間の確保が保育の質向上のためには重要であるとの指摘もあり、質の確保には直接的な子どもとの関わり以外の面にも目を

向ける必要がある。例えば、みずほ情報総研株式会社が行った「放課後児童クラブの育成支援の質の向上に関する調査研究」⁵⁾においても、質向上のための実践例として「育成日誌、保育記録による支援の記録と、毎日開催する会議での情報共有」、「子どもの様子で気になることを放課後児童支援員等全員で共有し、育成支援のあり方を協議」などがあげられている。

これらOJTの必要性やその充実による育成支援の質の向上、職員の資質向上の重要性についての指摘はあるが、育成支援の質の定義やその測定については、国内で標準とされるようなものはまだ存在しない。

例えば保育の質の測定としては、近年ECERS⁶⁾など、評価尺度を用いた評価についても注目されている。高辻(2016)⁷⁾は、あらかじめ項目を定め構造化されたチェックリストや評定尺度をもとに行う方法であり、系統的・網羅的に保育の全体的な成果や達成状況、不十分な点などの検証に適したアプローチだと述べている。しかし、評価尺度を用いた評価は、欧米では一般的な方法であるが、わが国ではまだ保育者にとって馴染みは薄く、理解度が高いとはいえない。保育評価尺度で、代表的なものは、ECERS⁶⁾であり、アメリカでテルマ・ハームス博士らにより1980年に開発された、3歳以上の集団保育の質を測定する尺度である。第3版は英語版が2015年に刊行され、2016年に埋橋らにより邦訳された。ECERSは、学術調査、自己評価、監査あるいは査察ツールとして信頼性が極めて高く、現在ヨーロッパ、アジア、南米20か国以上で使用されている。海外の研究では、この尺度得点と主体性、協調性の相関が認められており、国内の研究でも、発達検査の得点と相関が認められている⁸⁾。

このECERSの放課後児童クラブ版がSACERS⁹⁾である。SACERSは個別的な物的環境あるいは保育者からの関わりに注目し、その内容を高めていくことで、子どもの経験を豊かにするというアプローチであり、児童期の集団保育の総合的な質を測定する。具体的には、3時間程度の保育観察により、7つのサブスケール

に分類された47の項目につき、各項目に含まれる10前後の指標に基づいて7段階で評定を行い、指標となる質問ひとつひとつ「はい」または「いいえ」のいずれかに判定し、手続きに従って1点から7点までで評点を得ることで、保育評価や改善に活用する。各分野の得点や総合的な得点は、支援者の研修の程度や支援者1人あたりの子どもの人数などと中程度の相関が認められている。

このような尺度についての研究の他にも、現在日本では放課後児童クラブにおける自己評価や第三者評価についての研究も進められている^{10,11)}。実施状況としては、運営に関する自己評価が54.3%、第三者評価が29.5%²⁾となっている。また、子どもの育ちを測定することによって育成支援の質を検討しようとする場合もある。

本研究では、育成支援の質の定義としてSACERSにおける評価項目である「空間と家具（室内の広さや必要な家具、設備の設置など）、健康と安全（衛生管理や安全管理（行き帰りも含め）など）、活動（製作活動や遊び、科学的な活動など）、相互関係（支援員、子供、保護者、学校の関係性など）、育成支援計画（日課や地域と連携など）、研修（職員会議、研修、スーパービジョン）、特別支援（個別対応など）からなる総合的なもの」と仮に定義した。

これらを踏まえ本報告では、子どもと直接関わらない時間（環境整備や職員会議、記録の作成など）が育成支援の質に与える影響や、特に質の中でも相互作用の面に注目して調査を試み、今後の研究のための基礎資料とすることを目的とした。

2. 方法

2021年10月に佐賀県で筆者らが実施した研修（佐賀県放課後児童支援員認定資格研修）において、参加者138名（5会場）に対して、子どもがいない時間の勤務時間、職員会議の時間、環境整備の時間、育成支援の質、相互作用の質などについて質問紙調査を行った。

質問紙については、クラブ（支援単位）の登録児童数や職員数、職員会議や環境整備の時間、SACERS【新・保育環境評価スケール④】⁹⁾のサブスケール「相互関係」のとてもよい(7)の基準に該当する20項目について「とても当てはまる」から「とても当てはまらない」までの5件法での評価等で構成した。

調査は無記名として、調査対象者に対して調査趣旨、結果データの使用範囲等の説明を行い、調査への協力について書面による同意を得た。対象者の内、自身の回答を研究に用いることを許可し、書面による同意を示した者は協力を依頼した対象者のうち127名（協力率90.0%）であった。

分析においては、相関係数はピアソンの相関係数を用いた。

3. 結果

(1) クラブ（支援単位）の児童数や支援員数について

クラブの児童数は平均57.1（±38.5）名であり、支援員等の人数は平均5.1（±2.4）名であった。支援員あたりの平均児童数は11.1名であった。

(2) 子どもと直接関わらない勤務時間やその期間での業務内容

1日の子どもと関わらない勤務時間の平均は60.5（±42.3）分で、うち環境整備（掃除や整理整頓、安全確認、製作など）を行う時間は平均34.9（±23.5）分、職員会議（クラブの運営や支援についての情報共有や話し合い）を行う時間は平均16.5（±14.0）分、保護者や学校、地域との連携（学校や保護者との連絡会議、連絡帳記入、おたより作成など）を行う時間は平均11.4（±16.2）分となっていた。

また、記録（支援記録・業務日誌）作成時間は平均13.9（±15.9）分であり、記録の作成者は「リーダーが作成する」16%、「当番の支援員が作成する」58%、「全員が作成する」26%となっていた。

(3) 職場のクラブの育成支援の質について

「あなたの勤務するクラブは質の高い育成支援を行っていると思いますか」という設問（あわせて、本研究での質の定義「空間と家具（室内の広さや必要な家具、設備の設置など）、健康と安全（衛生管理や安全管理（行き帰りも含め）など）、活動（製作活動や遊び、科学的な活動など）、相互関係（支援員、子供、保護者、学校の関係性など）、育成支援計画（日課や地域と連携など）、研修（職員会議、研修、スーパービジョン）、特別支援（個別対応など）からなる総合的なもの」として評価するように示した。）に対して「とても質が高い」と回答した者が全体の4%、「やや質が高い」31%、「どちらともいえない」38%、「やや質が低い」22%、「とても質が低い」4%の割合で回答していた。

(4) 研修時間について

「クラブ内（地域・運営主体単位を含む）での職員研修を行うことができる時間は、1か月に何分程度ありますか」という質問に対する回答は平均42.9(±73.1)分となっていた。また、全体の59%が0分と回答していた。

(5) 相互関係の項目について

表1に相互関係の項目についての評価についての結果を示した。

結果、「定期的に保護者懇談会がある」「保護者が意思決定に加わる」という2項目が「当てはまらない」という回答が多く、「少なくとも2週間に1回、担当が同じ支援員がプランニングの時間をもつ」、「必要に応じて、個別の子どもの育成支援計画が作られる」という2項目が「やや当てはまらない」という回答が多く、「支援員は、スポーツや、そのほかおとなからの指導必要とする活動に、専門的に対応する」、「支援員は、子どもの行動上の問題を解決するのに、専門家から助言を得る」、「子どもは、よい対人関係問題の解決スキルや他者に対する肯定的なふるまいを見せる」、「親業、健康情報、スポーツ、家族向けの文化的活動など、いろいろな情報が知らされる」、「支援員のやりとりを肯

定的なものにする体制がある」、「2週間に1回、一般的な学業、子どもに影響を与えるようなクラスの状態について打ち合わせがある」という6項目で「どちらともいえない」という回答が多くなっていた。

(6) 相互関係の総合得点について

「当てはまらない」を1点、「当てはまる」を5点としたとき（20点から100点の範囲）、平均点は63.7(±11.5)点であった。

また、2名以上の協力のあった市町村での得点の平均を比較すると、57点から75点まで最大で18点の差がみられた。

(7) 質の評価や相互関係の総合得点の関連について

まず、育成支援の質の5段階での主観的評価と相互関係の総合得点は $r = .61$ と相関がみられた。

また、相互関係の総合得点と支援員1人あたりの子どもの数で弱い相関($r = -.23$)がみられた。特に、支援員1人当たり子どもの数が12人を超えると $r = -.37$ と相互関係の総合得点の低下が顕著となった。

主観的な質の評価と相互関係の各項目の関連では、相関係数が.40以上だった項目は「支援員と子どもが、お互いに尊重しあっている」($r = .48$)、「支援員は、スポーツや、そのほかおとなからの指導必要とする活動に、専門的に対応する」($r = .48$)、「子どもは、よい対人関係問題の解決スキルや他者に対する肯定的なふるまいを見せる」($r = .50$)、「親業、健康情報、スポーツ、家族向けの文化的活動など、いろいろな情報が知らされる。」($r = .43$)となっていた。

4. 考察

(1) 子どもと直接関わらない業務について

1日の子どもと直接関わらない業務時間の平均は約60分で、うち環境整備が約34分と最も時間がとられていた。ただし、これの結果はコロ

表1 相互関係についての評価

	当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	やや当てはまらない	当てはまらない	中央値	4分位偏差
a 子どもは帰宅時に助けてもらえる	33%	50%	14%	3%	1%	4	0.5
b 支援員は来所時や帰宅時に、保護者等にあたたかく接し、子どもについての情報交換を行う	43%	46%	7%	2%	3%	4	0.5
c 支援員は子どもの自立的な行動を支持する	25%	54%	17%	4%	0%	4	0.3
d 支援員と子どもが、お互いに尊重しあっている	13%	41%	41%	4%	2%	4	0.5
e 支援員は1人ひとりの子どもと話ができるように努力している	24%	44%	21%	9%	2%	4	0.5
f 支援員は、子どもが口にした考えを広げたり深めたりする	14%	48%	28%	7%	3%	4	0.5
g 支援員は、子どもに遊びについてのアイデアを話し、活動の内容を高められるよう助ける	17%	42%	31%	6%	3%	4	0.5
h 支援員は、スポーツや、そのほかおとなからの指導必要とする活動に、専門的に対応する	9%	16%	38%	22%	16%	3	0.6
i 支援員は、子どもの行動上の問題を解決するのに、専門家から助言を得る	8%	17%	31%	19%	25%	3	0.9
j 子どもの行動上の問題は、保育者と協議して解決を探る	15%	47%	22%	8%	9%	4	0.5
k 子どもは、よい対人関係問題の解決スキルや他者に対する肯定的なふるまいを見せる	1%	39%	50%	8%	3%	3	0.5
l 支援員は、聞き手に徹し、子どもの問題解決スキルを広げる	7%	61%	25%	6%	1%	4	0.5
m 親業、健康情報、スポーツ、家族向けの文化的活動など、いろいろな情報が知らされる	10%	20%	41%	17%	12%	3	1.0
n 定期的に保護者懇談会がある	3%	8%	20%	18%	52%	1	1.0
o 保護者が意思決定に加わる	2%	8%	27%	12%	51%	1	1.0
p 少なくとも2週間に1回、担当が同じ支援員がプランニングの時間をもつ	7%	12%	23%	12%	45%	2	1.0
q それぞれの支援員の責任の範囲が明確である	9%	44%	24%	9%	15%	4	0.5
r 支援員のやりとりを肯定的なものにする体制がある	9%	26%	35%	12%	19%	3	1.0
s 2週間に1回、一般的な学業、子どもに影響を与えるようなクラスの状態について打ち合わせがある	8%	16%	27%	12%	37%	3	1.0
t 必要に応じて、個別の子どもの育成支援計画が作られる	4%	18%	27%	17%	35%	2	1.0

ナ禍での調査の結果であり、コロナ禍以前はほとんどなかった消毒作業などに多くの時間を掛けているため環境整備の時間が増えている可能

性が高いことことを考慮する必要があると考えられる。同様に約59%の支援者員等が1か月間の研修時間を0分と回答していたが、これも同

様にコロナ禍のため研修が中止されていることを考慮して結果を解釈する必要があると考えられる。その他、職員会議が約16分、学校や保護者との連携が約11分となっており、合計すると約61分となり、子どものいない勤務時間とほぼ重なるため妥当な回答と考えられる。これらについても、コロナ禍で環境整備が長くなった影響で、会議時間等が短縮している可能性など念頭におく必要もあると考えられる。

(2) 相互関係の項目について

まず、「定期的に保護者懇談会がある」、「保護者が意思決定に加わる」という項目が「当てはまらない」という回答が多く、佐賀県では保護者の放課後児童クラブへの参画が少ないことがうかがえる。保護者の関与を強めることは質の向上や保証にとっても重要な課題だと考えられる。また、「少なくとも2週間に1回、担当が同じ支援員がプランニングの時間をもつ」、「必要に応じて、個別の子どもの育成支援計画が作られる」という項目が「やや当てはまらない」という回答が多くクラブ全体及び個別的な育成支援を計画的に実施することができていない実態もうかがえる。育成計画作成は、育成支援の質向上のためのPDCA サイクルには必ず必要なものであり、計画的な育成支援ということは全国的な課題であると考えられる。くわえて、「支援員は、スポーツや、そのほかおとなからの指導必要とする活動に、専門的に対応する」、「支援員は、子どもの行動上の問題を解決するのに、専門家から助言を得る」といった専門家との連携や「親業、健康情報、スポーツ、家族向けの文化的活動など、いろいろな情報が知らされる」といった保護者への情報発信、「2週間に1回、一般的な学業、子どもに影響を与えるようなクラスの状況について打ち合わせがある」というような職員会議についての項目も「どちらともいえない」との評価が多く十分とはいえないクラブが多いようであった。

(3) 質の評価や相互評価の総合得点の関連について

育成支援の質の5段階での主観的評価と相互関係の総合得点は $r = .61$ と相関がみられたことや、支援員1人当たりの児童数との関連から、主観的な質の評価も育成支援の質の評価としてある程度の妥当性・信頼性が確保されていると考えられるが、強い相関でないため、育成支援の質の測定方法としては主観的な評価のみでは十分ではない可能性が高いと考えられる。

また、相互関係の総合得点や質の主観的評価と支援員1人当たりの児童の人数に相関がみられ、支援員1人当たりの児童の人数が多いほどその傾向は強くなることから、支援の質や相互関係の充実には支援員1人当たりの児童数はこれまで指摘されているように重要な要因であると考えられる。

筆者の以前の調査¹²⁾では、職員会議の時間と育成支援の質の主観的評価などに相関がみられたが、今回は相互関係の総合得点などと子どもと関わらない勤務時間などの相関はみられなかった。この点については、さらに対象者数を増やすことやコロナ禍後に調査を行うなどして検討を行う必要があると考えられる。

育成支援の質の主観的評価と相互関係の各項目で相関が強かった項目は、「支援員と子どもが、お互いに尊重しあっている」、「子どもは、よい対人関係問題の解決スキルや他者に対する肯定的なふるまいを見せる」など子どもが落ち着き肯定的な姿を多く見せている場合に支援者は育成支援の質が高いと評価し、逆に子どもが落ち着かない姿を多く見せている場合に支援の質が低いと捉える可能性が示唆される。このような子どもの姿からの質評価もさらに検討する必要がある。

その他、クラブの設置されている市町によって大きく相互関係の得点などに差があることから過去の研究¹²⁾と同様に市町村や運営主体の取り組みが各クラブの育成支援の質に影響を与えている側面も大きいと考えられる。

(4) 今後の課題

今回はコロナ禍での調査であったため、コロナ以前や今後の育成支援の状況を反映している結果となっているのかについてさらに調査を重ねていく必要があると考えられる。

また、今回の調査では育成支援の質や相互関係に影響を与えている要因については、支援者1人当たりの児童数以外には明らかとならなかったため、さらに育成支援の質に影響を与える可能性のある要因について広く測定する必要があると考えられた。例えば、自己評価を実施する際の項目（要因）等やSACERSの他のサブスケールに関する項目を加えていくことなどが考えられる。現状の質問項目についても例えば、連携については多くの支援者が保護者との連携についての回答しているようであり学校との連携は含まれないようである。このことから保護者との連携と学校との連携に分けて回答を求めることがより正確な調査結果につながると考えられる。くわえて、各項目の測定精度についてもさらに高めることができるように質問紙の文言の検討などを進める必要がある。

さらに、相互関係の項目については、主観的な質の評価と一定程度の相関が認められ育成支援の質の評価方法として研修効果の測定などに有効に活用できる可能性があるが、今後相互関係以外のSACERSの項目についても関連を検討する必要性や、7（とてもよい）の項目への該当の程度を5件法で評価するという今回の質問方法が適当であるのか通常の実施方法でのSACERSでの評価との関連などを検討していく必要があると考えられる。

5. 謝辞

調査にご協力くださった佐賀県の放課後支援員等の皆様に感謝いたします。

6. 引用参考文献

- 1) 社会保障審議会児童部会放課後児童クラブの基準に関する専門委員会、放課後児童クラブに従事す

- る者の研修体系の整理－放課後児童クラブの質の向上のための研修企画検討会まとめ－、2015
- 2) 厚生労働省子ども家庭局、令和2年（2020年）放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の実施状況（令和2年（2020年）7月1日現在）、2020
- 3) 菅原航平、放課後児童クラブにおけるOJTの実施状況と課題について、別府大学短期大学部紀要、2020、39号、77-82p
- 4) 厚生労働省、放課後児童クラブ運営指針、2016
- 5) みずほ情報総研株式会社、「放課後児童クラブの育成支援の質の向上に関する調査研究（厚生労働省令和元年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書）」、2020
- 6) テルマ・ハームス、リチャード・M. クリフォード、デビィ・クレア著、埋橋玲子訳、新・保育環境評価スケール①、2016、法律文化社
- 7) 高辻千恵、保育学講座③保育のいとなみ 日本保育学会編 第14章計画に基づく省察と評価、2016、東京大学出版会、317-318p
- 8) 埋橋玲子、諸外国の評価スケールは日本にどのように生かされるか、2018、保育学研究 56巻1号 68-78p
- 9) テルマ・ハームス、エレン・V. ジェイコブス、ドナ・R. ホワイト著、埋橋玲子訳、新・保育環境評価スケール④〈放課後児童クラブ〉、2019、法律文化社
- 10) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社、平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（放課後児童クラブの第三者評価マニュアル等に関する調査研究）～放課後児童クラブの自己チェックリストと今後の第三者評価の方向性に関する論点整理～〈報告書〉、2019、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
- 11) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社、令和元年度子ども・子育て支援推進調査研究事業放課後児童クラブにおける第三者評価の実施に関する調査研究〈報告書〉、2020、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
- 12) 菅原航平、放課後児童クラブにおけるOJTと育成支援の質の関連について、別府大学短期大学部紀要、2021、40号、59-67p